

タイトル

平谷こども発達クリニックにおけるディスレクシアの取り組みの成果と見えてきた課題

要旨

平谷こども発達クリニックでの 18 年間のディスレクシアに対する取り組みに関して、これまでの経緯の振り返り、今後の課題を整理した。また現在クリニックで行っているディスレクシア児童・生徒への支援（個別の言語療法、ICT を活用した支援機器グループ、ディスレクシア児童を対象とする学習支援室）を紹介する。

本文

【企画の趣旨】

当クリニックは開設以来発達性ディスレクシア（Developmental Dyslexia：以下 DD）を重要なテーマとしてきた。DD への関心が高まり、学校からクリニックを紹介される児童生徒が増え、診断例は 2002 年の第 1 例以来 400 例を超え、その成果を本学会で連続した自主シンポ（2014：2015：2016：2017：2018）で発表してきた。DD 児は読みと書きの双方が困難で、しばしば計算障害も併存する。DD 児は 1 年の夏休みごろには学業に自信をなく深刻なトラウマ（演者は LD Trauma と呼んでいる）を受けることが多いので早期発見が重要である。年長時に DD のサインを出しているのでスクリーニング可能な場合も少なくない。注意欠如多動症（以下 ADHD）や自閉スペクトラム症（以下 ASD）に DD が高い頻度で併存するので、DD の併存を疑った経過観察が必要である。当クリニックで診断される DD の背景因子と支援活動を紹介する。

クリニックでの DD 診断・療育支援の成果と見えてきた課題

平谷 美智夫

18 年間の DD の診療から得られたこと：

① DD は ADHD や ASD に高い頻度で併存し、DD 単独例は 15% 前後。②就学前から療育に通い、就学後に DD と診断される児童も少なくない。このグループにはが DD 単独例は少なく ASD・ADHD などが含まれる。③就学後に DD と診断される児童は、読み書きの困難さを主訴とする児童のほかに、ADHD や ASD に拠る問題行動で受診し、DD と診断される例が少なくない。このような事例では担任は ADHD や ASD の特性に目を奪われ DD を見逃していることが少なくない。④ADHD や ASD では、就学前に読みの早期アセスメント（稲垣・原）、就学後に読字検査（稲垣・宇野）を実施すべきである。⑤DD には登校しぶりが多い。学校は DD 児童には辛い場所であるという事実を認識していただきたい。⑥ADHD・ASD の支援も重要である。⑦福井では DD に対する合理的な配慮が着実に進んでいるが十分ではない。

DD 児童生徒に対するクリニックでの個別言語療法

榊 智史

【目的】DD 児への指導のスタートとなる言語聴覚士による個別指導を紹介する。【結果】対象児の DD 重症度や知的能力、ASD・ADHD などの併存症、学齢、所属学級や学級規模等個々に合わせて必要な介入を行っている。実際には音韻認識など読む基礎力の向上、キーワード法、MIM（多層指導モデル）等を用いた読みのルールの指導、認知特性に合った学習方略の提案、担当教諭と連携をとり宿題の調整やディジー教科書使用の提案など学習面の環境調整を行っている。特に心がけているのは「語彙の拡大、言語力の向上」である。学齢期以降は言葉の獲得・拡大が滞ることが予想される。話す、聞くなどの読む以外の方略を用いて言葉の力を育むことは学習面のみならず、社会生活を送る上でも重要であると考えられる。【考察】読みの苦手さがあっても、学習意欲を保ち学校生活に参加できるようになった DD 児も少なくない。

ICT 利用を中心とするグループ指導（支援機器グループ）

高塚 真緒

【目的】iPad の活用方法の獲得、児童同士のコミュニケーションの増加を目的とする。【対象児童の選択基準】①学習障害の診断を受けている②支援機器を学習の補助として取り入れたいと考えている③グループ活動へ参加可能（小学3年生～中学3年生）【活動内容】月1回1時間（ST3名）段階を踏みながらステップアップする4つのグループで構成①ベーシックG：操作の基礎を学び、学習支援に活用するアプリを一通り学習する②ベーシック+G：基礎部分の復習、支援量を減らし1人で課題に取り組む時間を増やす③アドバンスG：課題後に他児と相談し考えをまとめる・自分の考えを発表する機会を設ける④アドバンス+G：実際の学習を通して使用するアプリの選択・決定を行う。【考察】児童の学習意欲の向上がみられており、具体的な指導・保護者からの意見などについても報告する。（金沢星稜大学の河野俊寛教授に指導を仰いでいる）

DD 児童を対象とする学習支援室

政井 英昭

【開設の経緯】当院では作文教室・学研と協力した学習支援室などを経て、2017.6よりDD児対象の学習支援室を開設した。【目的】①各自にあった学習方法をさぐり個別に支援する他、小集団での学び合いやコミュニケーションの場を設定し、その場面での支援を行う。②各支援方法を保護者や学校と共有する。【対象児童】開設時12名でスタートし、これまでに総数21名が参加した。2019.4現在では9名が在籍。①現在のグループ構成：小3年（5名）、小5・6年（各2名）②診断名：9名中、7名がDD、3名が言語発達遅滞（1名が併存）。7名がADHD、6名がASD、2名が軽度MR。③9名とも通常学級（5名が通級指導）【スタッフ】元教員・ST・心理士（計3名）【活動内容】週1回、17:00～18:30①みんなで学習（クイズ、カルタ、スピーチなど）②個別学習（宿題、コグトレ、MIMなど）③ゲーム（室内レクリエーション）の順で実施。【考察】成果や課題については、本シンポで具体的な指導内容と事例を通じて報告する。

DD 児童生徒の自尊心と二次障害としての不登校と学校不適応感の関連

仲嶺 実甫子

不登校の児童生徒の中には発達障がい診断を有する、もしくはその疑いがある者が多く含まれている（加茂・東條, 2010）。発達障がいの中でもDD児童生徒（以下、DD児）が不登校になったきっかけを調査し、その背景要因について報告する。またDD児は学習場面での失敗体験などから自尊心の低下が認められ、その結果、抑うつ気分といった気分の落ち込み、ひいては不登校や学校への適応感の低下が見られると考えられる。本シンポではDD児を対象に行った学校への不適応感に至る経緯に関する質問紙調査の結果を紹介した上で、登校しぶりのあるDD児に対して行った支援や学校との連携の一例について報告する。DD児の二次障害をどのように防ぎ、学校への適応を促すことができるか議論を深めたい。

キーワード

- 1、ディスレクシア
- 2、ICT
- 3、二次障害